

乳児保育の充実

——保育所保育の現状からの一考察——

小島千恵子 市野繁子

1. 問題の所在と目的

2017（平成29）年、「幼稚園教育要領」（以下教育要領）「保育所保育指針」（以下保育指針）「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下教育保育要領）3つの法令が同時に改訂（定）（以下、改定と統一）された。今回の改定は、乳幼児教育について再考するという問題の提起でもある。保育所保育指針（以下保育指針）の改定では、曖昧で予測不能な社会情勢や現状の中で、この先を生き抜くということを見据えて、子どもを育てる立場にあるものが「子どもの未来を改めて考えよう」と投げかけられたものであると考える。子ども一人一人が今を最もよく生き、主体的に自分の人生を生き抜いていくことができるようにするために、大人が、子どもに寄り添い、何をどのように導いていくのか考えることを提起している。特に保育指針の改定は、これまで以上に養護の理念と乳児保育の充実に力を入れている。これらは、子どもにとって人間の根幹を育てることが重要であると問いかけていると言っても過言ではないだろう。しかしながら、保育所保育の現状を見ると、待機児童や保育士不足などの様々な問題や課題を抱えている。その問題は、保育所の量的拡充が進められる中、保育所保育の質や、保育士の専門性の低下に影響していることは否めない。特に乳児保育は、人格形成の基礎を培うためには非常に重要であるとされながらも、保育の質が保証できているのかどうか疑問が残る。また、乳児保育では、特定の人の愛情深い絆を作る保育を求められているものの、少人数保育や育児の担当制による応答的なかかわりが行われていなかったり、職員間の協力や連携が確実に行われていなかったりする現状もうかがえる。

ここでいう「乳児保育」とは家庭ではなく、保育所等で使われる用語であり、保育所保育では、3歳未満児を指して、「乳児保育」と取り扱われることが多い。2017年4月の厚生労働省の統計によると、保育所を利用する1歳までの子どもはおよそ15万人弱、1、2歳児は合わせて約100万人である。この状況からも、保育所保育は、3歳未満児、3歳以上児という分類で行われている。新保育指針の保育のねらい及び内容については、心身両面において、短期間に著しい発育・発達が見られる1歳までの保育を乳児保育とし、歩行の開始をはじめ、基本的な運動機能が発達し、自分の体を思うように動かすことができるようになってくる1歳以上3歳未満時の保育とに分けて考えられている。この分類は、発達の過程から考えると当然のことであり、保育の基本的事項においても重要視されることである。本研究においては、新保育指針に記されているねらいおよび内容を踏まえながら、3歳未満児の保育を「乳児保育」として取り扱うこととする。

2015（平成27）年4月より、「子ども子育て支援新制度」実施以降、今回の改定に至るまでの

間、乳児保育に関する制度の流れや保育の「質」に関する研究、諸外国における乳児保育の状況等に関する研究は進められてきた。しかしながら、実際に乳児保育を担当する保育者の認識や実際の現状を具体的に把握し、課題を検討するまでに至っていないと思われる。本研究では、乳児保育の充実を図るために、3歳未満児の保育の現状の一部を明らかにし、問題や課題を整理するとともに、乳児保育の充実を図るための改善策を検討することとした。

2. 新保育指針がめざす乳児保育

(1) 日本の乳児保育の現状とその背景

日本の乳児保育は、1882年、鳥取県美穂村で篤雄平が農繁期託児所開始、1887年、石井十次による岡山孤児院設立、1890年、新潟の赤沢鍾美が学校開校時にその生徒の弟妹を保護したこと、1891年に起こった濃尾地震による孤児救済、東京紡績に工場託児所を設置したことなど、地方や民間団体、個人的に行われてきたことに遡る。公には幼稚園教育については取り扱われたものの、乳児の保育はそれぞれの家庭で行われるものとされてきた。

1950～60年代になって、急速な経済成長による社会構造の変化は、子どもを取り巻く生活環境も急速に悪化させ、共働きによる「鍵っ子」の発生、青少年の非行の増加などが社会問題となっていくことになり、家庭対策が強調させることになる。保育運動も盛んになり、「ポストの数ほど保育所を」という新日本婦人の会の保育所づくりの運動は有名である。以後、1979年の国連が定めた「国際児童年」において子どもの人権について考えられたり、1989年の合計特殊出生率が、「1.57」になり、これまでにない出産回避が認められたりしたことをきっかけに、子どもを生み育てることへの議論が深まった。特に少子化については、日本の経済低迷に拍車をかけることになるため、重要な社会問題となった。また、家庭の生計を保持するためには、夫婦の共働きはもとより、一緒に住む家族全員が働くことが多いことから、子どもの保育所入所は、余儀なくされているが、入所できる保育所の不足や、保育士不足のために受け入れ不可能という保育所もあるため、待機児童対策は近々の問題となった。待機児童の問題については、「保育園落ちた日本死ね」という、子どもを持つ母親からの SNS 投稿が有名になるほど、日本の大きな社会問題として考えられるようになっていく。

待機児童の問題について考えてみると、保育所の不足という点に注目されることになりがちであるが、前述したように、保育士の不足から、子どもの受け入れが不可能という現状もある。特に3歳未満児の保育は、保育士の配置基準に関係しているため、保育士不足から子どもの受け入れ不可能ということもある。保育士の有効求人倍率は、平成26年1月では全国平均で1.74倍となっている。平成25年度の新規求人倍率を見ると、9割超の都道府県において1倍を超えており、人手不足感が広がっている（2013 厚生労働省）。保育士不足は、待機児童対策への影響だけでなく、保育の質の低下や保育士の専門性の質の低下にも影響を及ぼすことが考えられる。しかしながら、保育士不足による保育の質低下あるいは、保育士の専門性低下の関係性についての調査などの先行研究は見当たらない。推察ではあるが、待機児童の解消を目指すことが優先され、保育の内容や保育の質、保育士の専門性についての議論が後回しになっていることが考えられる。

(2) 新保育指針における乳児保育

今回の改定に当たって示された方向性の中に「乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実がある。そこに示されたのは、この時期の子どもは、心身の発達の基盤が形成されるうえで極めて重要な時期であること。この時期の子どもが、生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人やものに興味を持ち、直接関わっていきこうとする姿は、「学びの芽生え」といえるものであり、生涯の学びの出発点に結びつくものであることを踏まえて、3歳未満児の保育の意義をより明確化し、その内容について一層の充実を図った（2018 厚生労働省）とある。特に乳児期は、発達の諸側面が未分化であることから、「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」「健やかに伸び伸びと育つ」の三つの視点から保育内容を整理して示すことで実際の保育に取り組みやすいようにしている。0歳児の乳児の育ちのイメージと5領域との関係について、汐見（2017）は、図1のように示している。改定の重要なポイントとして、乳児の育ちについて掲げられたことは、保育所保育にとって大変画期的なことであり、保育所の運営や方針にも影響を及ぼすことが推察される。

乳児の育ちのイメージと5領域との関係

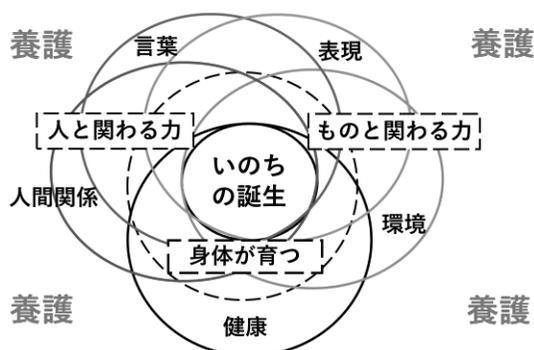


図1. 乳児の育ちと保育内容

(出典：全国保育士養成協議会中部ブロック第22回セミナーH29 汐見)

このように改定の方向性に示された内容は、乳児を含む3歳未満児の保育（以下、3歳未満児保育）の内容について考えることを示したものであり、3法令の関わる3つの施設に求められる乳幼児教育の内容や質を揃えることに重点を置き、改めて乳幼児教育とは何か考え直すことが求められている。保育所では新保育指針に記されている「乳児・1歳以上3歳未満児の保育」を理解して、乳児期の保育や子どもの育ちをとらえて、幼児期への接続、学びの連続性を考えることの重要性を挙げている。新保育指針が示していることは、3歳未満児からの連続性をふまえた乳幼児教育についてである。3歳以上児の保育を支えるには、3歳未満児の保育のあり方が重要であることを大きく影響することが示されていて、これまでの様々な分野での諸研究が総括されたものであると言ってもいいだろう。

すなわち、人間の育ちの中で、0, 1, 2歳児段階の育ちの意味が非常に大きく、この時期の保育を丁寧に行わなければならないということである。ことに基本的信頼感が育まれる乳児期は、愛

着関係（Bowlby 1991）で総称されるように、子どもの欲求に丁寧に応答することは、子ども自身の自由な探索行動の保障につながる。また、特定の人への深い信頼が支えになって、日常の中での様々な不安や不満を乗り越えるという繰り返しが、子どもの心の中に深い信頼感となり、後に他者一般への信頼感として根付いていく。それは、自分は無条件にありのままを愛されているという感覚、いわゆる自己肯定感となっていく（無藤ら 2017）。これらのことが、3歳以上児の幼児教育、学童期の教育へと連続されていくことが保障されなければならないということである。

新保育指針は、保育の質を保証することの重要性を示していることになる。しかしながら、前述したように、保育所保育の現状を見ると、保育の質の低下を問題視するよりも、待機児童対策が優先されていることが推察される。保育士不足の解消には、非常勤保育士を配置することが多いようである。非常勤保育士配置は、保育士の配置は確保されるものの、様々な問題から乳児保育の質向上にはつながりにくい現状があることが予測される。

乳児保育の質が軽視される傾向にある理由には、日本の保育に対する考え方が影響していることが予測される。子育ては母親がするものという、日本古来の「子育て観」が未だ残っていることも否めないだろう。前述したように、日本の乳児保育は、働く女性の著しい社会進出から始まっている。今も社会の経済状況の悪化などにより、女性が働くことを積極的に応援しようとする動きがある。子どもを育てながら働ける社会をめざすために、「とにかく、保育所を増す」こと、母親が働けることを優先して待機児童対策を行っているという見方があることは前述したとおりである。

保育は、人的環境が大きいことは言うまでもない。人が人を育てるところである。保育の質の向上も人がつくり出すところにあると言っても過言ではないだろう。子どもがどのような環境で育つことが望ましいのか、保育の専門職が何をめざすのか、考えていくことが必要であり、それが保育士という子育てのプロがめざすところである。保育の質や、保育士の質向上のための研修や自己研鑽等のキャリアアップについても改定の要点になっていることも忘れてはならないだろう。

3. 保育現場の現状調査

乳児保育の現状がどのようになっているのか、保育現場へのアンケート調査を行い、その結果から乳児保育の充実に繋がる策の検討を行う。

(1) 調査の概要

1) 調査対象

A県内の3市1町の公立、私立の保育所・小規模保育所において、0, 1, 2歳児を担当する常勤保育士・非常勤保育士

2) 調査方法

アンケート調査：選択及び4件法、自由記述

事前に各自治体主管課に直接趣旨を説明して許可を取って、各自治体の園長・主任保育士研修等において、改めて趣旨を説明し、質問紙を各保育所に配布した。質問紙は、園長に回収を依頼した。園長が回収後、手渡し及び郵送で筆者が受け取った。

回答の方法については任意とした。

3) 質問内容

- ①担当者の年齢
- ②男女の区別
- ③保育の経験年数
- ④所属の保育所の公立、私立の区別
- ⑤常勤・非常勤の区別
- ⑥保育担当対象年齢・複数担当の常勤・非常勤の組み合わせ
- ⑦担当制保育についての賛否
- ⑧担当制保育の方法・考え
- ⑨保育の状況（自由記述）
- ⑩保育に対する思いや考え（自由記述）

(2) 調査の結果と考察

今回行った調査では3市1町から質問紙290枚を回収することができた。アンケート調査の①～⑤の回答結果は以下のとおりである。

①**年齢** 20歳代 89人 30歳代 79人 40歳代 57人 50歳代 31人 60歳代 12人
無回答 22人
60歳代、無回答の中には、実際の担当保育士ではなく、園長、主任保育士、などの保育リーダーや管理職も含まれている。

②**男女の区別** 男性2人 女性282人 無回答6人

③**保育の経験年数** 1～5年 112人 6～10年 77人 11～15年 47人 16～20年 28人
21～25年 13人 25年以上 7人 無回答 6人
クラス担当の最高経験年数は、46年であった。

④**所属の保育所の公立、私立の区分** 公立 202人 私立 69人 無回答 19人

⑤**常勤・非常勤の区別** 常勤保育士 135人 非常勤保育士 146人 無回答 9人

⑥**保育担当対象年齢** 0歳児 44人 1歳児 0, 1歳児 9人 2歳児 103人
1, 2歳児混合 4人 0, 1, 2歳児混合 19人 その他 67人
担当は決まっていない。子どもの出席人数によって担当が決まる。人手が足りないところに補助に入る。(図2)

複数担当者の常勤・非常勤の組み合わせは、図3に示す通りである。

県内3市1町の一部の自治体の調査ではあるが、3歳未満児保育は、非常勤保育士に支えられていることがわかった。3歳未満児の保育に携わる保育士は、非常勤保育士が多いと一般的に言われているが、この調査においても、30歳代後半から60歳代は、非常勤保育士が多かったこと

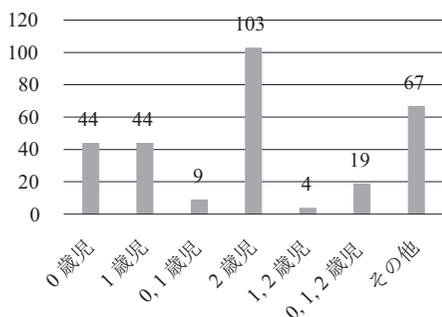


図2. 担当する子どもの年齢（人）

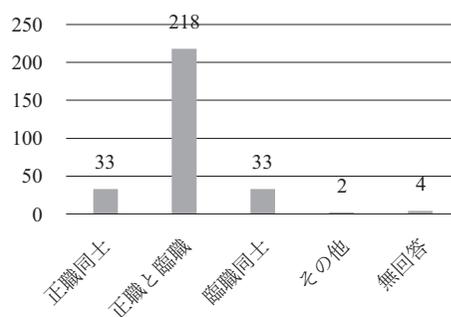


図3. 複数担当の組み合わせ（人）

から、その現状が推察される。保育は、複数で担当されていることが多く、常勤保育士と非常勤保育士の組み合わせで配置されていることが多い。組み合わせの様子を見ると、多くが各年齢に一人の常勤保育士が配置され、その他は、非常勤保育士が配置されているようである。保育室の有無や状況により、クラスを分けることができない場合は、一つの部屋に年齢毎の定員を入れ、子どもの人数に合わせて保育士を配置している。例えば、1歳児15人を一部屋に入れ、保育士は3人の配置とすると、常勤保育士が1名に対して非常勤保育士が2名ということである。回答を見ると、配置された保育士が4名で、1名だけ常勤保育士で、3名は非常勤保育士というケースがあった。A県内の保育所は、指導案の立案や、子どもの記録は、常勤保育士の業務になっていて、非常勤保育士の業務は、保育を行うことと、連絡帳を書くことになっているところが多いということを知ることがある。非常勤保育士の離職を防ぐために、業務を軽減することが目的のようである。非常勤保育士の負担を軽減できても、非常勤保育士が増えるほど、常勤保育士の負担は増大することになり、「保育士離れ」に繋がることになるのではないかと考える。保育現場が保育士不足の原因を自らつくっているということにはならないのだろうか。

保育所に向向き、乳児保育について聞き取った中には、3歳未満児の保育はすべて、非常勤保育士が行っているというところがあった。今回の回答の中にもいくつか同様のケースがあった。また、0歳児保育において、常勤保育士が産前産後休暇、育児休業に入るとその後は、非常勤保育士が配置され、非常勤保育士の複数担当で保育を行うことになるというところもあった。産前産後休暇を予測していなかった結果であったというが、常勤保育士の複数担任であれば、予測していなかったことが生じて、1名常勤保育士がいることで対応できるのではないだろうか。

乳児期から3歳未満児で大切にしたい愛着関係、基礎的信頼を育むための特定の人との深い信頼の絆づくりや、自分のやりたいことを思い切りやることができる環境づくりがこのような状況でそれを実現できるのか疑問が残る。保育所の使命、役割について認識を深めることが緊急の課題ではないかと考える。子どもの豊かな生活と、発育・発達を保証することが優先される保育所をめざしたいものである。

⑦担当制の有無及び賛否

⑧担当制保育の方法・考え

担当制保育は、ほぼ半数の保育所で行われている（図4）。担当制保育について賛成かどうか

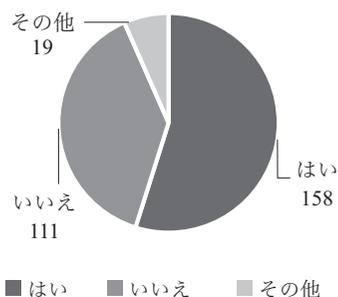


図4. 担当制の有無 (人)

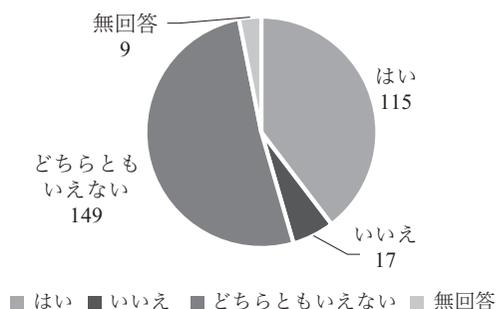


図5. 担当制の賛否 (人)

尋ねたところ、図5に示すとおり賛成であるという回答がある一方で「どちらともいえない」という回答が多かった。担当制を行っているという回答した保育士に、担当制の方法について尋ねると、ほとんどの回答が、「記録や連絡帳を書く」「食事・昼寝・排泄の担当児を決めている」「主活動の担当を交代している」「指導案の立案を担当制にしている」などであった。これらの回答から、担当制保育の真の目的について認識できていない様子がうかがえた。担当制の賛否について尋ねたところ、「子どもとの関係が深まるから必要である」「愛着形成のためにも大切」「子どもとの絆が強まる」などの賛成意見の一方で、「子どもが懐かなくなると、保育士不足なので休むこともできない」「どの保育士にも世話ができる方がいい」という反対意見もあった。回答が多数であったのは、いいこともあるけれど、困ることもあるという「どちらともいえない」という回答であった。この回答は、保育士不足が影響しているのではないかと考える。

乳児保育の充実を考えたとき、まずは、保育士不足による保育士の負担増大について解決することを考えなくてはいけないのではないだろうか。回答の中には、担当制は行っていないという保育士の中に少数ではあるが、「担当制にして子どもと十分にかかわりたいが、保育士不足でシフトを組むことが難しく行えないことが悔しい」というものがあった。乳児保育について考えを深めたいが、どうにもできない現実があることを訴える保育士も存在する。乳児保育を充実するために、担当保育士が今できることは何か、今一度自己研鑽も含めて認識を深める必要があるだろう。

⑨⑩調査の自由記述から

質問内容の⑨⑩についての自由記述から、乳児保育の内容や担当保育士の仕事について考えてみることにする。以下の記述は、質問紙に記述されたありのままを転記したものである。回収した質問紙のほとんどに記述があった。それほどに乳児保育の担当者の思いや願いの深さがうかがえる。以下に示す内容はその一部である。乳児保育の充実を考えると、現状を十分に理解する必要がある。その意味からも貴重な記述と言えよう。

今回の質問紙に記述された内容を見ると、乳児保育の現実が見えてくる。子どものこと、保護者のこと、保育環境、保育の形態、保育士の配置数、保育の在り方、保育士不足、保育士の資質、保育士間の関係性、連携、複数担任の難しさ等いろいろある。以下の記述から、乳児保育充実のためのキーワードを探ることにする。

以下自由記述（原文のまま）

- ・ 1クラス8人を2人なので、ゆったりと関わることができている。乳児だからこそ、やはり少人数をゆったりみることができる環境、人員配置が必要だと思う。
- ・ 担当制でしっかりと保育するため、あまり大きな集団にならないよう、1対5で保育者が入れれば良い（20:4の1クラス）では子どもが落ち着かない
- ・ 子どものありのままの姿を大切にし、保育士も時間に追われず、ゆったりとした保育をめざしたい。
- ・ 大きな部屋で、0,1歳児合わせて21名の大人数で生活しているため、落ち着かない。勤務形態の関係で保育士間の連携も取りづらい。この環境の中でいかに保育をしていくかに考えを巡らせることも増えている。
- ・ 保育士がもっと増えれば、今よりも子どもの状況に合わせてゆったり関わることができる。
- ・ 担当制を理解しきれておらず、集団保育になってしまっている。子どもたちが家庭的にゆったりと過ごすため、主体的に遊べる環境づくりが大切。1人ひとりの月齢も保育時間も違うので個別に対応できるようにしていきたい。
- ・ 「ゆったりと、のんびりとした保育」のために保育者を増やしてほしい。
- ・ 担当制を行えるような保育室にするための動きが見られない。保育士の質を求めるだけでなく保育士増員や室内の状況把握をしてほしい。担当制保育の見学や研修を増やしてほしい。
- ・ 1対1の関わりを増やせるような環境が大切。
- ・ 乳児保育は重要視されているが、雑用や他クラスの補助などを任せられることが多く、ゆったりと関わる保育ができない時がある。保育士同士の十分な話し合いの必要性を感じる
- ・ 10人を2人担任のため、目が届きやすい。少人数の方が落ち着いて過ごせる。部屋が大きすぎると子どもが落ち着かない時もある。
- ・ 1人ひとりに合わせた保育ができるといいと思う。2歳児は年少に向けて少しずつ集団での生活を取り入れていけると良い。子どもが過ごしやすい環境設定、十分に体を動かせる活動を取り入れていきたい。
- ・ 親と離れている分、寂しさや不安をしっかりと受け止め、愛情を込めて関わることが大切。
- ・ 1歳児を連続で担任したことで乳児期における愛着形成の大切さを再確認。心の余裕を持って保育できるように日々の準備をしっかりとしたい。保育士を増やしてほしいと感じるときもある。
- ・ 異なる考え方を持つ保育士で保育するのは難しいが、複数の良さを生かして保育したい。
- ・ 家庭的にゆったりと関わってあげたいと思う反面、集団を意識した保育をしていてどうしたらいいかと考えるそれぞれの子どもへの思いが保育者それぞれ異なると、足並みをそろえて保育することが難しい時もある。
- ・ 乳児は1人ひとりに家庭的な雰囲気保育体制を変えていく。
- ・ 1歳児に1:5は保育者が少ないと感じることもある。愛着形成が大切な時期だからこそ、信頼できる保育者の気持ちや時間に余裕を持って関わっていけるようにできたらいい。
- ・ 複数担任なので、情報交換が必要。その際の他の保育者からの視点が勉強になる。
- ・ 乳児保育の研修に参加する中で、改めて乳児期の大切さを学んだ。安心・安全・安定の養護面をしっかりと援助していき、学びの土台を作っていく重要な時期であると思うので、担任全員がそのような同

じ思いで保育をしていかなければならないと思う。

- ・個性豊かな子どもが増え、1人ひとりに手がかかる。子育てが苦手な母親が多くなり、母親を育てる必要があると感じる。臨職で乳児クラスの担任になると事務仕事が多い。乳児クラスと温かく手厚保育ができるように保育士の人数を配置してほしい。イヤイヤ期の強い子どもが多いと1対1の時間が十分に取れない。
- ・配置基準は決まっているが、個人差が大きな時期なので、子どもの様子に合わせた保育者配置してほしい。
- ・心が豊かに育つためには、情緒が安定できるようなつながりや信頼関係が大切なので、思いに寄り添い安心して過ごせるような環境をつくる。心を掛け、声をかけたり、配慮したりするが必要。また、自然と触れ合うことも大事な時期なので色々な経験をさせてあげたい。
- ・1, 2歳児クラスで発達に差があるが、室内環境や人員環境の影響で分けて活動することが難しい時がある。また、0, 1クラスと1, 2クラスがあるので、同じ1歳児でも差が出てくる。
- ・臨職の保育士が多いので、時間の制限や仕事内容等、負担の内容に納得した上で働ける環境が必要。誰もが自分の意見を言える雰囲気づくりを心掛けていきたい。
- ・乳児保育の大切さを改めて勉強したい。他の職場の先生や保育方法を知りたい。
- ・1人ひとりの子どもの今”の育ちを捉える難しさを実感。保育者同士の連携が日々できている。
- ・担当制を行えるような保育室にするための動きが見られない。保育士の質を求めるだけでなく、保育士増員や室内の状況把握をしてほしい。担当制保育の見学や研修を増やしてほしい。
- ・保育士同士の考え方の違いがあり、すすめるのが難しい。
- ・保育方法や保育観などをペアと話し合い、共通理解を持ったうえで日々の保育に臨むことが大切。
- ・親と一緒に居られる時間をたっぷりとることを大切にしてもらいたい。
- ・働く母親がゆとりを持って子どもと接する時間が必要。
- ・3歳未満児は子どもの育ち方の基礎となる大切な時期であるという認識が現場の保育士（年が上になってくるにつれて）であっても低いと思わざるを得ないほど、乳児保育を軽んじていると思えるような対応であると感じることが大変多くあります。人材不足が一番の原因であるとは思いますが、乳児の担当側からするとモチベーションもあがりやすく、その為に意識のずれが生じて、人間関係がまずくなる等、悪循環を生んでいると思う。
- ・理想は語られるが、具体的なことはされていない。例えば給与を増やして人数を増やせば人員が回り休みもとれる。しかしその分子どもの情報共有はより密にする必要がある。子どもの安心安全な保育のためには理想よりも現実の現場環境を改善する必要があると思う。
- ・子どもの成長をサポートすることがわかりました。子どもの育ちを考えていけるようにしたいです。
- ・生活の部分をしっかり抑える必要はあるが、実際は流動的なので担当制に限界を感じる。月齢が大きくなるほど子どもそれぞれの意思も出てくるので担当制は難しいと思う。保育に対して求められることが多すぎて、“子ども自身を見る”ということがおろそかになっている。子どもがいて、何を考え、何が好きで、何をしたいか、保育士は感じ取り子どもの気持ちを満たしていくことが大切だと思う。
- ・新任保育士は乳児担当でベテランと組むことが多いが、新任にあまりその大切さが理解されているか疑問。

- ・幼児組とは“近くても遠い”。連携の取り方を工夫すべき。保育者同士が気遣い、配慮できる関係が良い。
- ・乳児担当の先生はとにかく優しくあたたかい先生だと良いと思う。
- ・今回指針が改訂され、乳児保育の充実がなされたことは良いことだと思う。
- ・乳児期は人間形成の基盤となる大切な時期。保護者から離れ、他者と信頼関係を築く重要な年齢でもあり、一日一日の保育を大切にしていきたい。
- ・保育観や子どもへの思いの違いでぶつかることもあるが声をかけ、伝えあっている。乳児と幼児で分かれているので2歳から3歳へのつながりが曖昧。
- ・乳児クラスは臨職が多く、仕事量の多さを負担に感じながら保育している人が多い。それぞれ複数担任のクラスは保育観の違いや経験の差、相性など、何かしら問題を抱えている。また、臨職は乳児の経験は多いが幼児の経験は少ない人が多い、幼児の様子がわからなかったり、視野が狭かったりする。正職がしっかりとサポートして仕事していくことが大切。乳児ベテランの臨職から学ぶこともたくさんある。
- ・愛着形成において最も重要な時期。親子関係が良好であるために担当制を取り、継続した親への関わりが必要。子育て下手による後天的な発達支援が必要な子どもが多いと感じる。保護者同士の交流の場が必要。
- ・乳児期はとても大切だということを常に思いながら1人ひとりに関わられるよう心掛けなくてはいけない。
- ・乳児はどうしても臨職が中心となるため、正職にかかる負担が大きいと思う。保育士の人間関係が難しい。
- ・休みの日に自由な時間を作るために仕事をし、休日も子どもを保育園に預けている親が多いように感じる。親子の時間を作る支援ではなく、親の時間を作るための“支援”をしているように感じる。愛情が足りない子どもが増えている。働く親への“支援”を強調しているが、3歳未満まで家で24時間子育てしている親への支援はどう考えているのか。親から十分な愛情を受けずに保育士は親と同じ愛情を与えるのは不可能である。未満児が親と長い時間を過ごせる時期。親が休みの日くらい親子がゆっくり過ごすことを推奨してほしい。
- ・新しい指針で乳児保育の項目が詳しく書かれるようになるため、今までの乳児との関わり方、保育の進め方を見直しながら振り返り、子ども1人ひとりが安心して過ごせるような保育を行っていきたい。
- ・臨職で組むことが多いので、仕事のことで相手に負担がかかり過ぎていないか、不満を言っていないのではないかと思う部分がある。時間に限りがあるので、相手に迷惑がかかると思うと帰りづらくなってしまふ。保育の考え方が違うと子どもたちへのおろし方が変わってきてしまうこともあるのだと感じた。
- ・発達に合わせて手作りおもちゃを作っている。保育の環境を整えるため手作りは必要である。時間がほしい。
- ・乳児保育は、複数担任で保育者全員が連携をとりながら子どものことを見守っていけるのでとても楽しい。また、様々な意見やアイデアを聞いて取り入れることができるためたくさんのお話を吸収していこうと思う。
- ・ゆったりとかかわることができる保育・一緒にいる保育士がいることで緩やかに保育できる。
- ・担当制であれば子どもが落ち着きやすい・家庭に近い雰囲気で保育するのが理想。

以上の記述を含むすべての記述を整理すると、以下のように分類された。

- ①乳児保育の重要性について（愛着形成期・人格形成の基礎を培う時期・安定した生活環境が必要な時期・学びに向かう基礎づくりの時期等）。
- ②この重要な時期にはゆったりかかわることが必要である。
- ③ゆったりかかわるためには保育士の適切な人員配置が必要である。
- ④乳児保育担当者には臨時職員が多い。
- ⑤職員の負担が増えている。
- ⑥複数担任のため、連携や人間関係作りが難しい。
- ⑦保育士がもっと乳児保育について勉強する必要がある。
- ⑧乳児保育のための環境づくりについてもっと考えることが必要である
- ⑨担当制について認識を深めることが必要である。
- ⑩複数担任は、学びあうことも多いので、もっと保育士間で連携しあうことが必要である。
- ⑪自治体や経営者が乳児保育の現状をもっと理解して、今の乳児保育について必要なことを考えることが必要である理想だけ掲げていては、子どもにとってよい保育を行っていけない。

上記記述内容から、乳児保育を担当する保育士は、「保育」は好き、「子ども」も好きだけれど、その難しさや負担感が強く感じられるために、乳児保育の楽しさや、おもしろさ、保育への意欲を失わせていることが推察できる。一方で、何があっても保育の楽しさやおもしろさを追求していこうとする強さに欠けていることもうかがえる。制度などを改善することは簡単にはいかないが、人の力や士気で、コツコツと改善できることもあると考える。今の乳児保育の課題ではないだろうか。

4. 「乳児保育」充実の鍵

今回の改定で示された乳児保育の充実は、この時期の子どもは、心身の発達の基盤が形成されるうえで極めて重要な時期であること。また、生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人やものに興味を持ち、直接関わっていかうとする姿は、「学びの芽生え」といえるものであり、生涯の学びの出発点に結びつくものであることも強調している。乳児保育は、人格形成の基礎を培うために極めて重要な時期を支える役割を果たしているということを述べていることでもある。

子どもが自ら「学ぶ」ためには、人を愛し、人に愛されることが基本になることは言うまでもない。また、身近な大人が、子ども一人一人に寄り添い、子どもが「今、気づいたこと」や「今、やりたいこと」を見守ったり、一緒に行ったりして、子どもが自分のやりたいことが実現できることが重要である。そのためには、子どもにも大人にもゆったりとした生活の時間が必要ではないだろうか。いわゆる情緒の安定を図るということである。

保育の現状調査の自由記述には職場環境や人間関係での愚痴、不満が多く、楽しいことや、保育に対するやりがい、子どもに寄り添うことの充実感を記したものが少なかった。このようなことから保育所内で子どもも、保育士も慌ただしい生活を送っている様子をうかがうことができる。保育所という集団生活の場で、「大人が子どもに何かを学ばせねばならない」というような

使命感で保育している印象も残った。このような状況からは、心の安定やゆとりなど生まれることはないだろう。保育士にゆとりがなくなれば、子どもの心もゆったりとした状態にはならないのではないだろうか。昨今の保育の現状を見聞きすると、ゆとりなど持てる状況ではないことは推察できるが、子どもにとって、人格形成の基礎を培うこの重要な時期に必要なことを体得できないことが案じられる。

人材確保や環境整備といったハード面を今すぐに改善することは難しいことかもしれないが、「今何が必要なのか」、「今何ができるのか」を保育士間で考え、話しあうというソフト面の改善や修正は、今からコツコツと積み上げていけばできることがたくさんあるのではないだろうか。乳児保育の意義について深く考える、専門的な知識や技術を向上させる等、まずは、保育士自身が意識を変え、スキルアップを図ること、また、保育士間で知恵を出し合って、より良い乳児保育をめざして協同することから始めてはどうだろう。

5. おわりに

保育新時代と言われ、保育指針が改定されるたびに、指針を読み解き、実際の保育の現状を見つめ直してきた。幼保一体の議論が続く中、新保育指針は新教育要領の内容との整合性に焦点を当てて改定がなされている。その中心は、乳児保育についての記載である。乳児保育が開始されてから50余年、いつもその重要性を謳われ、子どもの育ちについて取り上げられながらも、なぜか「子守り」の考え方は払拭されることなく、議論の中心は、子どもをいかに多く保育所に入所させることができるか、という「待機児童」対策になっている。保育士等はこの待機児童対策に翻弄され、保育士の本来の使命・役割の中心である「子どもの豊かな育ちを保証するための保育」について優先されていないことは否めないことが今回の調査からも推察される。

しかしながら、乳児保育の重要性について、現場の保育士からの発言もあることから、現実を見据えたとうえで、「今、何をどうするか」専門職である保育士が、実際に動くことで、変わることができると思う。今回の調査にとどまらず、今後も乳児保育にかかわる保育士から聞き取りを行ったり、乳児保育の現場に入ったりして現状を見る機会を継続しながら、21世紀を支えていく子どもの将来を見据えて、3歳未満児の保育が充実していくために、保育現場の現状把握とともに保育者の保育に対する認識を把握する。そして、乳児保育の重要性に対する意識を高くするために、現場の保育は本来どうあるとよいのか、研修等の内容を含め、保育現場で、実際に保育している保育士との議論を重ねたいと考える。

付記

本論文は、第3回日本保育者養成教育学会において研究発表したものを加筆修正して作成したものである。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました3歳未満児担当の保育士の皆さんに感謝申し上げます。

引用文献

厚生労働省「職業安定業務統計」(2013)

厚生労働省編『保育所保育指針解説』p. 89, p. 121 (2018) フレーベル館

汐見稔幸「全国保育士養成協議会中部ブロック第22回セミナー記念講演会資料」(2017) 全国保育士養成協議会中部ブロック

参考文献

汐見稔幸『新指針・要領からのメッセージ さあ、子どもたちの「未来」を話ませんか』(2017) 小学館

Bowlby『愛着行動 母子関係の理論(1) 新版』(1991)

汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子『日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史 150年』(2017) 萌文書林

野沢祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美「乳幼児保育の質に関する研究の動向と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第56巻 (2016) 東京大学大学院

阿部和子他「2. 保育フォーラム 新制度化の乳児保育(3歳未満児保育)のありかた」『保育学研究』第54号第3号 (2016) 日本保育学会

(受理日 2019年1月8日)